

# 古筆切拾塵抄・余話

——「宮本切」という古筆切について——

小島孝之

今回は（いつものことでもあるが）、原稿の準備にかけられる時間が二、三日しかないという切羽詰まった状況に追いつまれているので、連載の主題を中断して、一つの脇道の話を書いておこうと思う。

古筆切という断片情報を調べていると、よくわからないことが後から後から積み重なっていく。だから、たとえ小さな事柄であっても、何か一つのが明らかになった時の喜びは必ずしも小さくないのである。

小さなことだが気にかかっていたことの一つに、「宮本切」と呼ばれる古今集の断簡のことがあった。この名称を初めて目にしたのは、久曾神昇博士の『古今和歌集成成立論』の記事であった。

他方、古今集の古筆切は数えきれないくらいの種類があり、それはもう、うんざりする程である。一例を挙げれば、藤原為家筆という古筆鑑定家のお墨付き（？）がある古今集の断簡を筆跡の違いで分類していくと、小松茂美博士は『古筆学大成』で、「北野切」「角倉切」「野路切」などの固有名を持つ名物切以外に、（一）から（十）まで十種類の古今集断簡に分類して、図版を掲げている。しかし、それらは主な物に限定したと言うべきものであって、それ以外にも、私に知り得た古今集切を分類してみると、なんと四十種類以上に上るのである。それらの中にはたった一枚の断簡のみで、ツレとなる同一筆跡の断簡を見いだせないものが多いのは事実であるが、名物切となると、さすがに一枚だけということはない。減多にない。大概は何枚かのツレを見るのが普通である。

ところが、前述した「宮本切」というのは、固有名をもつ名物切であるにもかかわらず、他にツレらしき断簡を見ることができなかった。かなり稀な例ではあるが、それだけのことなら、たぶん私はたいして気にも留めないで放置していただろう。

ところが、放置できない事情が発生してしまったのである。およそ二十数年前のことである。当時、私は立教大学に在職していたが、史学科の日本歴史担当の教員に、中世史の碩学藤木久志教授がおられた。当時藤木先生は斬新な発想と方法で、中世史に鮮やかな足跡を刻んでおられた。私は非常に多くのことを学ぶとともに、鮮烈な印象を受けていたのであった。ある時、藤木先生から、「これはどういうものですか」と、写真を見せられ、ご質問をいただいた。そのころ、藤木先生は新潟のある旧家の古文書の調査をなさっており、その資料の中から出現したもので、「光厳院筆の短冊」と言われていたらしい。しかし、形状は短冊のように見えるけれども、内容を見れば、古今集の断片であることは一目瞭然だった。古筆切の断片をその形状から短冊と誤解する例はままありがちで、そのこと自体に驚きはまったくないのだが、その断簡に付属している「極め」に驚いたのである。それは古筆了信

が明治十一年に書いた極め札が包み紙に収められていたのがあるが、その包み紙の表面に、「光厳天皇宸翰 名葉宮本切」と記されていた。『古今和歌集成立論』以外に初めて「宮本切」を見たわけで、久曾神博士の「宮本切」に初めてツレが出現したことになる。これは、前述した、「小さな」喜びの一つであるが、これを調べているうちに、またまた困った問題が出て来てしまったのである。『古今和歌集成立論』の掲げる「宮本切」と、了信の鑑定した「宮本切」が、ツレではないのかという疑問が湧いてきてしまったのである。

あらためて、「宮本切」について調べてみた。手許にある名葉集の類をまず確認することにした。刊行されて間がなかった伊井春樹氏らの編になる『新版古筆名葉集』（昭和六三年、和泉書院）は四種の古筆名葉集の類を翻刻してくれていて、たいへん便利でありがたい存在であるが、ここには「宮本切」の名称は登載されていなかった。私の手持ちの安政五年序『増補古筆名葉集』にも「宮本切」はない。ところが、田中塊堂編『昭和古筆名葉集』（昭和二二年、鳩居堂）には、光厳院の項の二番目に「宮本切」が立項されている。

『昭和古筆名葉集』の光厳院の項を抜き出すと、

光厳院 貞治三年七月七日 寶算五十三

六條切 四半雲紙続古今ノ異本二行書歟未詳高八寸

一分

宮本切 雲紙古今哥一行書高八寸三分五寸五分

四半 古今歌二行書

同 撰集ノ歌ヌキ書二行力キ

色紙形 砂子切箔凡四行書

同 雲紙真名仮名凡四行書

とある。同書の序文を見ると、「この昭和古筆名葉集は即ち新撰名葉集以来、古筆家、愛好家によつて切られた新名物切及び同集に脱漏せるものなど百余点を加へ更に古筆家正統の秘帖「翰墨林」に記されたる名物切を併記し、広く真蹟と対照して誤れるもの、足らざるものを補注し編者が備忘に書き留めたものであるが」とあるので、新たに切られた新名物切かと思いたくもなるが、安政五年の『増補古筆名葉集』と対照してみると、実はほとんど一致していて、相違はただ二点、単に「四半」とされていた二行目の項を「宮本切」の名称に書き換えたことと、「六条切」「宮本切」の項に寸法を書き加えたことのみである。とすると安政五年の段階ですでに古筆

切として流通していたことになる。すると、この新たな名称は、序文に言うところの「古筆家正統の秘帖「翰墨林」に記されたる名物切」に基づくものであらうか。

新潟某家の断簡に付された古筆了信の極め札の包み紙の上書きは、「宮本切」なる名称が明治十一年ごろまで遡るものであることが分る（ただし、上書きが、極め札の作成と同じ時期だという確証はないが）。以上で、久曾神博士の「宮本切」という名称が、決して根拠のないものではなく、何らかの根拠があつて付されたものに違いないということは分つた。しかし、そうなると新潟某家の断簡と異筆ではないか？という点が問題になる。久曾神博士の根拠は何だったのだろうか、という不審が胸中にわだかまっていた。

藤木先生には、右のような事柄を中心に、判明した事柄をまとめてお答えして一応の責を果たし、そのまま小さな疑問として、頭の片隅に留まつたのであった。

ところが、久曾神博士は御架蔵の古筆切を影印刊行するという実に有り難い企画を実行され、その第一弾として平成七年に、『古筆切影印解説 古今集編』（風間書房）を出版されたのである。ここで、ご所蔵の「宮本切」の大きな写真が初めて公開されたのは言うまでもない。『古今和歌集成成立

論』の図版はあまり大きくはないので、同筆か否かを判断するのはやや心もとないところがあったが、その点は完全に払拭されたといつてよい。しかし、私の関心はむしろ、そこに添えられている「極め札」の方にあった。「光厳院 宮本切」と記してあるが、古筆家による極め札ではなく、誰が書いたかわからぬただの紙片に過ぎない。それだけだとすると、果たして確かな根拠となし得るのか疑問は消えない。

ところが、ところがある。刊行を終え、学界に紹介するという役割を果たし終えたからという御判断であろうが、博士は役目を終えた古筆切を処分なさり始めたらしく、幾つかが古書店の目録などに回り始めた。そうした中にこの「宮本切」も混じっていたのである。平成十四年に、それを目録で目にした私は、もしかすると印刷公表された以外の情報が付随しているかもしれないと思い、早速購入することにした。幸いなことに入手することが出来たのであるが、紙背に鉛筆で「宮本切」と書いてあるだけで、残念ながらそれ以上の新しい情報は得られなかった。

平成十八年に、私の架蔵する古筆切だけを使って『古筆切で読むくずし字練習帳』（新典社）という小冊子を作った。

自分の退職記念にお世話になった方たちに差し上げようとい

う非売品のつもりで作ったのであるが、出版社の方で教材用に販売したいというので、そのようにしていただいたところ、案外好評であつたらしく、少しずつだが売れ続けているらしい。それはよいとして、この本の表紙に、「宮本切」の写真を掲載したのであるが、それには多少の思惑があつたのである。目につくところに写真があれば、誰かが、それならここにも似たようなものがありますよと、ツレの情報を教えてくれるかもしれない、などと虫のよいことを考えたからであつた。

ツレの情報はまだないのであるが、驚くべき幸いに恵まれることになった。久曾神博士の最晩年の教え子である日比野浩信氏から私信をいただいた。日比野氏と久曾神博士のお孫さんに当られる鶴田大氏のお二人で、久曾神博士の遺品である古筆切の整理をなさっている中でこの「宮本切」に関わる紙片が見つかったので、この「宮本切」の現在の所有者である私がこれも一緒に持っているべきであると、鶴田氏のご厚意を得て、御恵与くださったのである。「光厳院 宮本切」と薄葉の小さな紙片に書かれたもので、博士の名称同定の一つの根拠になっていたものようである。おかげで、久曾神博士の『古今和歌集成成立論』以来の「宮本切」名称の由来は

おおむねわかったように思われる。有り難いことである。

さて、もう一度、架蔵（久曾神博士旧蔵）断簡と新潟某家蔵の断簡の比較の問題に戻ろう。これを少しでも解決するにはぜひともツレの出現が必要である。そう思っていたら、ついに新たな「宮本切」が出現したのである。平成十九年十二月の『思文閣古書資料目録 205号』に「宮本切本 光厳天皇古今集切」なるものの写真が掲載されていた。雲紙を縦に用いた料紙で、目録の説明には、「紫雲入料紙」とある。

架蔵のものは藍の雲であるが、筆跡は同筆らしく見える。これは！と思つてすぐさま注文したのであるが、今度はすでに売却済みであるとの返事、残念ながら入手できなかった。誰か、研究者が入手されているならば、遠くない将来紹介される可能性はあるだろうと期待している。そして、これからもツレが市場に出て来る可能性は高まったように思える。

青雲と紫雲があるならば、もしや雲のない素紙の部分もあるのではないか？、あるいは、新潟某家の断簡のように狭い数行で切断されていれば、雲の部分を含まないものもあるかもしれないと思ひ直して、伝光厳院筆の古今集切の写真を丁寧に見直していたところ、一つ、もしかすると同筆かもしれないという断簡を見つけた。平成五年十一月の東京古典会

目録に50番として写真が掲載されている数点の古筆切の中の一枚がそれである。ツレであつてほしいという気持ちで眺めていると、どんなツレらしく見えてくるのであるが、冷静になつて見直すと、やはり筆跡が違うように見える。どうもそんなに簡単に問屋は卸さないということなのであろう。それにしても、雲紙の美しい料紙に書かれた古筆切である。もう少し出回つてもよさそうに思われるが、実は大部分は冊子のままであるなどということもあり得るか。思文閣の目録のキャプションに「宮本切本」とあるのがひつかる。



図1 新潟某家蔵「宮本切」

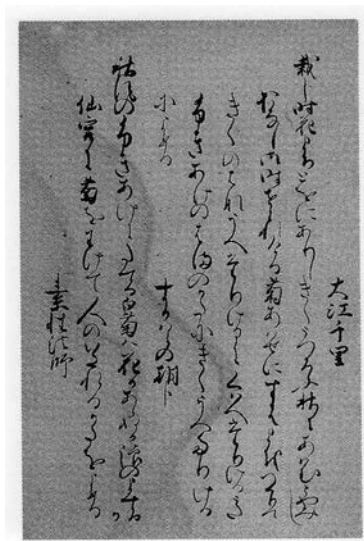


図3 思文閣古書資料目録  
205号掲載「宮本切」

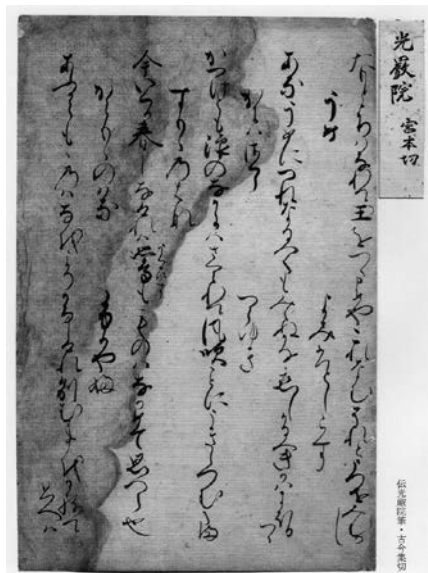


図2 架蔵（久曾神昇博士旧蔵）宮本切